

地球科学者のアウトプットのコツ 生涯にわたって活用できるシリーズ

十五年前、鎌田浩毅さんは、岩波ジュニア新書から『地球は火山がつくった 地球科学入門』を出した。現在、十刷という人気の本こそ、「科学の伝道師」誕生のきっかけだった。ジュニア新書のこと、読書の意義ということを鎌田さんに聞いた。

京都大学大学院人間・環境学研究所教授

鎌田浩毅

●かまた・ひろき 1955年、東京生まれ。専門は火山学、地球科学、科学コミュニケーション。『地学のツボ』（ちくまプリマー新書）、『火山噴火』（岩波新書）、『地学ノススメ』（ブルーバックス）、『地球の歴史』（中公新書）、『座右の古典』（ちくま文庫）など著書多数。

教養の授業にぴったり

——地球科学入門という、すごく大きなテーマをジュニア新書でまとめられたのは？

旧制高校に代表されるように、あの時代まで、厳然と教養主義がありました。残念ながらそれは二十一世紀に見事に消滅してしまったとい

うことがあります。専門を勉強するために、あるいは教養を身につけるために本を読むということから多くの人が遠ざかってしまった。そうすると出版社も学者も、それまで単行本で著してきたものを新書へとシフトしました。新書は一冊である分野

がぜんぶわかるという優れモノですからね。岩波新書、中公新書、講談社現代新書に代表されるいわゆる教

ーストラインの新書になっていると。

僕が学生だった四十年前は新書で勉強したのですが、いまの学生、京大生ですが、「新書は難しい」と言います。事実そうなんです。出版事情もありますが、専門書はもともと売れず、単行本も売れない。けど新書にすると売れるので、学者も新書で書こうとする。選書、叢書もぜんぶ新書に流れ込んできた。そうして新書の内容のレベルが一気に上がったわけです。アカデミックな賞でも新書が受賞しています。

僕の著書で言うところ、『火山噴火』（岩波新書）と『地球の歴史』（中公新書）で火山と地球の歴史が全部わかるように書きましたが、学生たちには岩波ジュニア新書やちくまプリマー新書を紹介するんです。両シリーズはとくに文系向けの教養の授業にちょうどいい。ジュニア新書『地球

は火山がつくった』と、プリマー新書『地学のツボ』は京大の教科書で長年使っています。

——平易で簡潔で、門外漢でも楽しく読めました。

なぜ平易にするかというところ、今の大学生は高校で地学を学んでいないからです。私の世代が高校生だったころは、物理・化学・生物・地学の四教科は必修でした。ですから高校で地球の歴史をまがりなりにも知ることができた。いま地学を履修するのは一割以下、五%くらいじゃないでしょうか。地学を教える教員もここ二十年ほどで激減しています。それに地学は受験に採用されませんか、履修科目からポロツと落ちる。文系は理系の科目がなくてセンター試験だけですし、選ばれても生物と化学ですね、とっつきやすいから。物理と地学は数式が出てくるから敬

養新書です。そうなると、今度は、新書がけっこう専門的になります。その結果、いまや新書すら読まれなくなってしまうわけです。

つまり新書だったものが、岩波ジュニア新書やちくまプリマー新書といった中高生向けのシリーズに置き換わっているとも言えると思いますね。ジュニア新書、プリマー新書が、昔のレベルでいうところのファ

遠される。

いまでは世界史と日本史を学ぶ機会があっても、地球の歴史を知る機会がまったくなくなっていいほど与えられていない事態になってしまったわけです。

専門家の見地から言うと、一千年ぶりの「大地変動の時代」に入った日本列島の地殻変動も、地球の歴史の一部なんです。今から二十年くらい後に首都直下地震や南海トラフ巨大地震が起きるのですが、そのとき地学の知識を5%の人しか持ち合わせていないとなると、これでは困ります。地球科学について、日本人の九五%が中学卒業レベルということですから。非常に知識が貧しい。そこに大地震が襲ってくる。そこをなんとかしなくてはと、僕は「地球科学」の伝道をしているわけです。だから中学校卒業レベルを想定した講